

## 松坂教授の古稀を祝す

池 田 浩 太 郎

平成四年に古稀を迎えられた松坂兵三郎教授は、平成五年三月末をもって定年退職され、成城大学名誉教授に推挙された。

本学経済学部教授会は、機関誌「成城大学経済研究」第一二五号を特別号とし、「松坂兵三郎名誉教授古稀記念論文集」を編むことを決定した。松坂教授の古稀を祝し、長年に亘る教授の学恩に、心からなる感謝の意を表したいためである。

半世紀も前からの松坂教授の最も親しい学友であり、わが国経済学界の重鎮でもある、荒憲治郎、伊東政吉、吉野昌甫の三教授は、われわれの企画の趣旨に賛同された。そして、それぞれ力のこもった論考をお寄せいただいた。編集委員一同の感謝一入なるものがある。

松坂ゼミ門下生を代表する形で小島照男教授から、また、本学法学部の寿田竜輔、中川和彦の両教授からも、心からなる寄稿をえた。われわれの深く喜びとする所である。

もちろん、本学経済学部からは、十指に余る方々の論考を、日頃の研鑽の成果を世に問う形で、本論文集に収

松坂教授の古稀を祝す

松坂教授の古稀を祝す

載することができた。

このような企画では慣例となっている、松坂教授の経歴と業績目録の作成にあたり、松坂教授は自ら筆を執られ、詳細かつ興味深い「自作年譜」を寄せられる形で、われわれに御協力をいただいた。

本特別号が、このような浩瀚な論文集となって上梓することができたのは、ひとえに松坂教授の御人柄のゆえである。

この記念論文集が、上記の方々の御協力をえて、松坂教授に捧げるのに恥ずかしいものになりえたことを、編集委員の一人として、ひそかに喜び、かつ、多くの方々の御尽力に感謝している次第である。

昭和二十年代半ば、松坂教授は成城大学の創立に参加される形で、経済学部就任された。以来、平成五年三月末までの四十年以上に亘り、専任教授として一貫して本学、とくに本学経済学部の発展と充実に、力を尽くされて来られた。

現在経済学部教員の最古参の私、池田浩太郎がここに職をえたのは、松坂教授に次いで、昭和二十九年のことであった。

したがって、松坂教授の御退任とともに、成城大学および本学経済学部の草創を知る現役教授は、一人もおられないことになったのである。まさに成城大学の、また経済学部の、一つの時代が終ったことになる。

松坂教授は、その学殖、人柄に加えて、成城への着任時期、教員の年齢構成などの理由もあって、昭和三十年代には経済学部若手教員の先頭に立つ存在たらざるをえなかった。

この時期の若手教員で、現在経済学部におられるのは、中村英雄、上野格、岡田清、杉ノ原保夫、山田高生の諸教授である。

松坂教授を頭に、われわれ当時の若手は、よく集まっては、経済学部の将来の内容的充実と向上について、語り合い協力し合ったものである。

松坂教授と私とがかかわった、当時のエピソードを二つばかりここに記しておきたい。

昭和三十年代の前半期に、われわれは協力してアメリカの著名な経済学者マルティン・ブロンフェンブレンナー教授の、経済学部学生向け特別連続講義を実現させることができた。その上、雑誌「成城大学経済研究」へも寄稿していただけることになった（Martin Bronfenbrenner, Long-Range Projections of the Japanese Economy, 1962-1975, 同誌第十号、昭和三十四年七月、所収）。その御礼をこめて、松坂教授と二人でブロンフェンブレンナー教授御夫妻を食事に招待したときのことを、楽しく思い起す。

昭和三十年代末頃になると、成城大学の経済学部にも、また後発の文芸学部にも、大学院設置の気運が高まり、両学部同時に、これが設置申請をおこなうことになった。

当時の経済学部の長老教授の内には、これにきわめて消極的な方も居られた。それゆえ、当時の高垣寅次郎学長のもと、内田直作、岡田俊平の両先生を中心に、経済学部の若い教員のほぼ全員が、大学院経済学研究科経済学専攻の創設準備委員となって、箱根合宿までして、その準備作業を完遂した。

また、その設置申請にあたり、経済学部本体の一般教育部門の社会科学系列担当の専任教授陣の充実が必須の条件であった。そのとき、高垣先生がその人選に非常にお困りのことを直接先生からうかがった。私はただちに

松坂教授の古稀を祝す

松坂教授と語らって、われわれの氏名をそこに貼り付けていただくべく申し出た。そして、高垣先生からは感謝のお言葉をいただいた。

結局、成城大学では大学院経済学研究科のみが、申請通り一挙に博士課程までの設置が認可され、われわれはまことに晴れがましい思いをしたのであった。

昭和四十年代以降には、松坂教授は大学学生部長、経済学部長、大学院経済学研究科長などを歴任された。経済学部のみならず、成城大学全体の発展にも、大きな貢献をなされたのである。

私たちは、松坂教授の今後一層の御健勝と学問的御精進とを祈念し、併せて後輩への変らぬ御指導を教授にお願い申し上げたい。

「成城大学経済研究」の創刊号（昭和二十八年九月）からかかわって来られた松坂教授に、同誌特別号としての本書を捧げる。私たちの感謝の微意をお汲み取りいただければ、幸いこれに過ぐるものはない、と思っている次第である。

平成六年七月